［座談会］

日本におけるグローバル・スタディーズの受容と地域研究

出席者　臼杵　陽（日本女子大学文学部教授／『地域研究』編集委員長）
遠藤泰生（東京大学大学院グローバル地域研究機構長）
寺田勇文（上智大学総合グローバル学部教授）
宮崎恒二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）
峯　陽一（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）
司　会　福武慎太郎（上智大学総合グローバル学部准教授）

開催日　二〇一三年一〇月一八日（金）

福武　本日は「日本におけるグローバル・スタディーズの受容と地域研究」というテーマでお話いただきます。グローバル・スタディーズは、ポスト冷戦期の急速なグローバル化に関わる諸研究として、一九九〇年代後半にアメリカで生まれた新しい知のアプローチです。日本の主要な大学でも現在、グローバル・スタディーズの名のもとに制度的再編が進んでおります。

興味深いのは、発祥の地アメリカでグローバル・スタディーズの誕生は、地域研究にとっての危機と認識されたことです。冷戦の終焉後、地域研究が急速に衰退する一方、それに取ってかわるかたちで誕生したのがグローバル・スタディーズだと認識されたと私は理解しています。

福武慎太郎（ふくたけ・しんたろう）
プロフィールは032頁に掲載。

ところが日本のグローバル・スタディーズの展開は、大学院や研究所、そして学部教育においても、地域研究が中核的な役割を担っています。アメリカと日本の展開はなぜ違うのか。そこで、みなさんが所属されている研究機関ではグローバル・スタディーズに対応しどのような改組・再編が行われつつあるのか、最初にうかがいたいと思います。

アジア研究から生まれた上智グローバル・スタディーズ

寺田　上智大学では外国語学部がずっと地域研究を担っていました。一九七〇年代から外国語学部は英語、ドイツ語、フランス語、イスパニア語、ポルトガル語、ロシア語という六学科体制になっており、それ以外に国際関係と言語学の副専攻がおかれていました。

そこに一九八二年、アンコールワット研究で知られる石澤良昭さん、最近亡くなられたインドネシア研究の村井吉敬さん、フィリピン考古学の青柳洋治さんが中心となり、アジア文化研究所を作りました。教育面では外国語学部の国際関係副専攻でアジア研究科目を開講していましたが、一九九〇年代に入り、アジア文化副専攻が独立してできました。それ以来、外国語学部は六つの語学科と国際関係副専攻、アジア文化副専攻、言語学副専攻の三つで、現在まできています。

二〇〇二年にＣＯＥプログラムの公募が始まり、当時は外国語学研究科という名称でしたが、大学院の国際関係論専攻の人たちと地域研究専攻のわれわれと、比較文化専攻の三つのユニットで申請することになりました。それらの

三つの専攻が共同して取り組む共通の課題として、グローバル・スタディーズという日本ではまだ新しい試みを中心にしようと決めたのです。

国際教養学部にワンクさんという中国をフィールドとする社会学者がいます。出身はアメリカで、アメリカのそのような流れにはいつも注意を払っており、グローバル・スタディーズのコースを上智に作りたいと考えていました。そして「地域立脚型グローバル・スタディーズ（Area-Based Global Studies）の構築」というテーマのＣＯＥが始まりました。当時のアメリカのグローバル・スタディーズは、金融とか資本の国際移動とかが中心で、それとわれわれの立場はかなり異なりました。われわれは地域に立脚し、地域から世界の変化を見るようなアプローチで、グローバル・スタディーズを始めようということになりました。

それにともなって、二〇〇六年四月にはそれまでの外国語学研究科を再編し、グローバル・スタディーズ研究科が誕生しました。専攻としては国際関係論と地域研究、グローバル社会専攻という三つの専攻がおかれています。グローバル社会専攻というのは、国際教養学部というすべての科目を英語で行っている学部の上に位置する大学院プログラムで、英語ではGlobal Studiesといいます。

世界規模の連携組織としてグローバル・スタディーズ・コンソーシアムがあります。発足した二〇〇七年当時から上智大学と一橋大学は加盟組織で、現在でも上智大学は幹事校の一つです。現在はそれにヨーロッパとアフリカもいくつか入っていますが、年に一度アニュアル・ミーティングを開催しています。そのようなところとも連関しつつ、グローバル・スタディーズを進めていこうという気運が学内にありました。

そして二〇一四年四月に総合グローバル学部を新設しました。これまで外国語学部所属で学科をもっていなかった国際関係副専攻とアジア文化副専攻の専任の教員が中心となり、カリキュラムは国際関係論とアジア、中東・アフリカ地域研究を核にするということで、名称が総合グローバル学部となりました。英語ではFaculty of Global Studiesです。

普通ですと、総合グローバル学部には二学科を作って、国際関係論学科と地域研究学科にするのですが、一学部一学科にしました。国際関係論系で二つの領域があって、つまり国際政治学か市民社会・国際協力論というカリキュラムの括りと、地域研究系でアジア研究と中東・アフリカ研究があり、国際関係論系の二つの領域の一つを、それから地域研究系の二つから一つを学生は選択しなくてはならない。つまりグローバルとローカルの両方の視点を学ぶということになっています。

寺田勇文（てらだ・たけふみ）
プロフィールは059頁に掲載。

「地域研究を捨ててグローバル」という話ではなく、地域研究者の立場からいえば、「地域研究をより現代的に発展させる要因としてグローバルな流れを取り込む」ということでした。

アメリカ研究から生まれた同志社グローバル・スタディーズ

福武　同志社大学でも二〇一〇年、グローバル・スタディーズ研究科、グローバル・スタディーズ専攻が設置されました。教員をみると、地域研究者が多数を占めている構成になっています。

峯　上智大学とは双子の姉妹のようなものですが、もともと同志社大学のグローバル・スタディーズ研究科の母体は、一九九一年に設置されたアメリカ研究科でした。これはユニークな試みだったと思います。一九五八年に設置されたアメリカ研究所を母体に、途上国ではなく先進国であるアメリカ合衆国という空間を、地域研究のユニットとして総合的に研究する研究科だったのです。

　これを踏まえつつ、大学全体の改革の一環として、グローバル社会のニーズに応える大学院としてグローバル・スタディーズ研究科を発足させることになりました。アメリカ研究科はアメリカ研究クラスターになり、そこに現代アジア研究クラスターとグローバル社会研究クラスターが加わるかたちで、三つのクラスターが編成されました。これらは専攻ではなく、あくまでクラスターで、それぞれの垣根をできるだけ低くして、共同で研究や教育を組織していこうという趣旨です。これらは地域研究の色彩が強く出てくるような編成になっています。まず、アメリカとアジアがあり、アメリカは北米が中心で、アジアは中国も強いですが、朝鮮半島研究も強い。

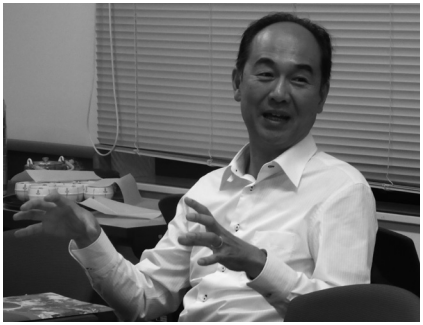
　そして三番目のグローバル社会研究クラスターですが、ここでは越境的な問題、たとえば移民や難民問題、国際開

発、人間の安全保障など、いわゆるグローバル・イシューを中心に扱うことになっています。ただし実態としては、グローバル社会クラスターの所属教員も地域研究者で、中東やアフリカ、ヨーロッパやラテンアメリカなど、「北米とアジア以外の地域」の専門家が所属しています。ですから、おっしゃる通り、教員には確かに地域研究者が多いです。このように研究科全体として、地域研究をベースにしながら、地域研究からグローバルに攻め上がろうという趣旨でデザインされていると言っていいと思います。

同志社のグローバル・スタディーズの特徴を、私の主観的な理解として三つあげておきます。第一に、研究でも教育でも、個人の力を重視しています。地域研究には職人芸のようなところがあります。マルチ・ディシプリナリー、つまり学際的という言葉がありますが、どのような方法論をどのように組み合わせるのかというのは、個々の研究者の力量、経験、研究の蓄積にかなり依存します。特定の学会の流儀に染まった人たちが集まってきて、「あなたはアフリカの政治学ですか。私はラテンアメリカの文学です」とか言いながら学際的な教育研究をやるというのではなく、一人ひとりの教員の内部で、方法論が火花を散らしながら融合している。私自身、アフリカの歴史もやれば、政策分析もやるし、文学もやるし、計量もやります。私たちの研究科の教員には、そういう意味での地域研究者が多い。つまり、それぞれが一国一城の主として、政治経済、文化、歴史、言語など、たくさんの包丁を持ち替えながら自分の対象地域に迫ろうとしているわけです。

個人の力を重視するというのは、学生にも当てはまります。院生の四割くらいが留学生ですが、留学生も一般学生も互いに生身をさらす付き合い方をしていて、それを教員が焚きつけるようなことをしています。多数派の日本の流儀に従わせるのではなく、イスラム圏から来ている留学生のために、研究科の建物のなかにメディテーションルームを整備したりもしています。私のゼミの場合も、アフガニスタンやキルギスタンの学生や、イスラム教徒になった日本人学生がいるので、今日は全員参加のコンパだから酒と豚肉はやめましょう、と言い出すと、留学生たちのほうは「先生たちは好きに飲んでもいいんじゃないですか」と言ったり、そういう素直なやりとりを通じてゼミの一体感ができていきます。

パレスチナ研究が専門の日本人院生とパレスチナの留学生がいて、ウガンダ人の院生とウガンダ研究に取り組む日本人院生がいて、こういう集団がごたまぜに学んでいると、日常のぶつかりあいから互いの人間的な好き嫌いも当然でてきますし、そこに上から枠をはめることはできるだけ避けて、横の対話のなかから新しいものができるような——意図したというより結果的にこうなった面もあるので



峯陽一（みね・よういち）
プロフィールは060頁に掲載。

すが、そういうカオスの力みたいなものが研究科の原動力になっているのではないかと思います。

二番目の特徴が「グローバル・イシュー」です。地域研究の一国一城の主が集まるだけだと、下手をすると研究科はバラバラになってしまいます。そこで、研究と教育をまとめるためにグローバル・イシューを重視して、具体的なイシューごとにアド・ホックに集まってくるという仕掛けになっているわけです。私たちの研究科では「グローバル・ジャスティス」という講演会を頻繁に開催していて、その成果を書籍として刊行することもしています。最近では国連の重鎮で、長年アムネスティ・インターナショナルの事務局長もされていたセネガル出身のピエール・サネさんをお呼びして、R2P（保護する責任）をテーマに二度の国際会議を開催しました。「アジアのある架空の国が紛争状況になって大量の難民が出たときに、近隣の国や地域機構や国連はどのように介入すればよいか」という課題について、院生たちがロールプレイ型の国際会議を試みる。登壇者の半分くらいは留学生です。そこに世界のエキスパートが参加して、一緒に議論するわけです。このような取り組みは、「国際会議の企画と実践」という授業として単位化しています。

三番目の特徴は「超域研究」です。地域研究のフレームが閉じてしまうと面白くないので、そこを超えたい。そこで、地域の次元とグローバルの次元を結ぶ中間項が大切だと考えるわけです。私が担当しているプロジェクトなのですが、二〇一三年の一一月に南アフリカでの準備会合を終えて、一四年の七月には次の国際会議を開催することになっています。テーマは、アフリカとアジアの文化接触の国際関係論です。中国のアフリカ研究者やアフリカのアジア研究者など、アジアとアフリカで互いの地域を研究する人たちが集まって、一九五五年のバンドン会議ではないですが、互いに相手と自分の地域を再発見していこうとする試みです。この国際会議では、外交的なハイ・ポリティクスではなく、人と人との日常的な接触を重視します。たと

えば、中国人移民のアフリカでの経験、アフリカ人留学生のインドの大学での経験、アフリカ人商人の中国でのビジネス経験など、生活のなかでの他者の認知とアイデンティティにかかわるナラティブを集めて、互いに報告しようというわけです。地域のフレームを認めたうえでの越境の試みですね。

最後に一つ、大きな付加価値として、二〇一三年からグローバル・リソース・マネジメント（GRM）という新しいリーディング大学院プログラムが始まりました。これは、グローバル・スタディーズ研究科と理工学研究科の二つが主幹として運営している実践的な文理融合の大学院プログラムです。たとえばグローバル・スタディーズの学生が工具を片手に実習をして、太陽光発電の仕組みを学んだり、結果的に家の電気工事ができる資格を得たりします。つまり、理系のロジックが肌でわかるようになる。インフラを中心に水や電気、情報通信など、途上国で仕事をする理系のエンジニアの発想が理解できるような、文系の実務家を育てるわけです。逆に理系の方では、エスニックな関係や地元の文化、不平等、ガバナンスの問題など、新興国での自分の仕事の社会的な文脈を洞察できるエンジニアを育成する。そのようなプログラムが走り始めています。

「地域」「言語」から「イシュー」「ディシプリン」へ
——東京外国語大学総合国際学研究科

福武　のちほど研究科の名称についても議論したいのですが、上智や同志社では、「グローバル・スタディーズ」はそのままカタカナで日本語訳にしていません。二〇〇九年に設置された東京外国語大学総合国際学研究科は、英語での正式名称は、「Graduate School of Global Studies」です。これまでの地域文化専攻、言語文化専攻、そして国際社会専攻を改組して総合国際学研究科として設置したということですが、そのあたりの経緯をうかがいたいと思います。

宮崎　名称の問題ですが、東京外国語大学の場合、二〇〇九年の研究科改組の際に、「総合国際学研究科」という名称を付け、それに近い英文名として「Graduate School of Global Studies」となりました。あらためて見て、そういえばGlobal Studiesという名前だった、という意識です。それ以前は「地域文化研究科」でしたが、「地域文化」だと特定地域に限定されるイメージが強くなりすぎるという意見があり、もう少し広い視野から総合するようなものにしたいということで、二〇〇九年に改組し「総合国際学」という名に改めました。地域に囚われすぎないというイ

宮崎恒二（みやざき・こうじ）
プロフィールは060頁に掲載。

メージを与えたかったということでしょう。

しかし、地域文化研究科の時代にも、ある種のグローバル・イシューとも地域研究とも言える、平和構築、紛争予防講座が、すでに英語の修士プログラムとして発足していました。他方、二〇〇六年の大学院の前期課程の再編では、それまでの地域割りの専攻を言語文化専攻、言語応用専攻、地域・国際専攻、国際協力専攻という研究領域別の四専攻に改編しています。四つの専攻のうちの二つ、言語文化と地域・国際がどちらかといえば研究者向けで、言語応用と国際協力はもう少し実務家養成向けといった色彩をもっています。

それに加えて二〇一二年に、外国語学部を言語文化学部と国際社会学部の二つに分けていました。外国語大学の外国語学部ということで、これは語学学校だろうというイメージが強くて実態を表さない。実際にはもっといろいろなディシプリン系のことをしていますので、それをはっきりと示すメッセージを表しました。

このように見てくると、地域別の七専攻の研究領域別への改編、地域文化研究科から総合国際学への改称、そして外国語学部から研究領域別の二学部への改編と、一貫して地域色を消していることになります。しかし、「この地域が専門です」というかたちではなく、「このような分野が専門です」ということになると、外国語大学の特色が出ないのではないか、もう少し地域を強調しようという意見も出てきています。

少し話が飛んでしまいますが、「グローバル・スタディーズ」という言葉で検索をかけてみると、じつにいろいろな大学に専攻や学部があります。大部分が地域研究とはまったく関係なくて、いちばん極端な例は、「英語で授業をします、英語を強化します、留学させます」、それをグローバル・スタディーズと称している場合があり、世間的には、グローバル・スタディーズといえば、そのような矮小化されたイメージで捉えられてしまっているのではないか、と思います。

東京大学駒場キャンパスと「グローバル地域研究」

福武　東京大学駒場キャンパスでは二〇一〇年、大学院総合文化研究科の付属施設としてグローバル地域研究機構が設立されました。このグローバル地域研究機構の英語の正式名称が「Institute for Advanced Global Studies」です。その傘下に従来からの付属施設であるアメリカ太平洋地域研究センター、ドイツ・ヨーロッパ研究センターが移行して、「人間の安全保障」プログラムから生まれたアフリカ地域研究センター、持続的開発研究センター、持続的平和研究センターが加わって、これら五センターの複合体としてスタートしています。

遠藤　組織の改組・再編の視点から見た場合、駒場におけるグローバル・スタディーズは、三本の柱に支えられていると言えます。

その第一の柱は、学部における専門教育の長い歴史です。地域文化研究学科と国際関係論学科が駒場に最初に生まれたのは一九五一年で、もう半世紀以上も前のことです。まず地域文化研究学科は、英・米・独・仏の国民国家研究、すなわち冷戦時アメリカで生まれた地域研究をなぞるかたちでスタートしました。その後、ロシア科、アジア科、中南米科が設置され、ここ数年では地中海・イタリア、韓国朝鮮を括りとする分科も生まれています。国民国家よりも広いリージョンを対象とするのが、それら後発の分科の特徴です。

一方駒場の場合、国際関係論の教育にも同じ長い歴史があります。ただ一九九〇年代、国立大学の重点化が進むなかで、国際関係論の学科は、従来通りの国際関係論と政治学・社会学・社会思想などを総合する相関社会科学の二つに分かれ、総合社会科学を学科の看板に掲げつつ現在にいたっています。

駒場の場合に複雑なのは、先ほど峯陽一さんから「超域研究」という言葉が出ましたが、「超域文化科学」と総称される学術を教育する学部専門課程が一九九〇年代からあり、そこにも文化人類学や比較文学比較文化、言語情報科学、国際日本文化論などの、グローバル研究に近接する分科が設けられていることです。地域文化研究、総合社会科学、超域文化科学、これらの学科に含まれるさまざまな学部専門課程を支える一六〇人を超す専任教員の研究教育活動のうえに、駒場のグローバル・スタディーズは立ち上がっていると私は考えています。

第二の柱は、各種研究センターの活動の厚みです。まず北米・アメリカ合衆国を対象とするアメリカ研究センター

が一九六七年以来、四半世紀を越す歴史を持っていました。このセンターが二〇〇〇年に、アメリカ太平洋地域研究センターと名を改め、北米研究とオセアニア・太平洋地域研究を接合する方向に拡充改組されました。オーストラリア研究の客員教授ポストもこのセンターに属します。さらに冷戦が終焉を迎えたのち、「もう北米だけでもない」という学内外の気運を受け、ドイツ・ヨーロッパ研究センター、中東地域研究センター、アジア地域研究センター、それにイタリアでの遺跡発掘調査を主たる活動とする地中海地域研究部門などが、学内外からの資金を呼び寄せながら次々に立ち上がりました。各研究センター間の連携はまだかならずしも密ではありませんが、それでも、歴史教育や国際移民などを共通のテーマに共同で研究を行う機会が増えています。

最後の第三の柱は、二〇〇四年から走り始めた「人間の安全保障」大学院プログラムです。このプログラムは最初五年の時限プログラムとしてスタートしたのですが、ご存じのアマルティア・センほかが説いたHuman Securityの概念を下敷きに、「開発・平和・共生」を前面に打ち出し、それまでの地域文化研究や国際関係論以上に、実践性、現代性、領域横断性を重視する教育を行うようになりました。これが社会の需要に合致したのではないでしょうか。たいへん活発な教育プログラムとして今も活動を続けています。

そしてこの「人間の安全保障」大学院プログラムは、先ほどから申し上げている地域文化研究、国際関係論、相関社会科学、超域文化科学、言語情報科学、それぞれの専任教員のほかに、環境科学や疫学などを専門とする理系の教員をも巻き込みながら運営されています。福武さんから最初に紹介のあった、開発、平和、アフリカに焦点をあてた三つの研究センターは、このプログラムの研究部門という位置づけです。二〇一二年には「グローバル共生」大学院プログラムという、「人間の安全保障」プログラムにおける人文科学面を強化した大学院も設置されました。さらに二〇一三年冬からは多文化共生社会を標榜するリーディング大学院プログラムも始まっています。

一言で説明するのはとても難しいのですが、要するに、以上に紹介してきた駒場の豊かなリソースをグローバル世界が抱える諸問題に立ち向かう学知にまとめあげるために「グローバル地域研究」という名を冠した機構を二〇一〇年に立ち上げたというのが私の理解です。ですから、機構の組織と各種教育プログラムとがかならずしも整然とつながっているわけではありません。むしろ、その混沌とした状況の中からグローバル・スタディーズの次のかたちを模索しているのが現在の駒場だと考えています。

福武　名称について議論が出たことはなかったでしょうか。

遠藤　「グローバル」という言葉は、アメリカ太平洋地域研究センターの将来像を語る際に、二〇〇〇年代半ばから各種の文書に現れていました。ただ、先ほど申し上げたように、全地球をカバーするようなかたちで、五〇人をゆうに超える地域文化研究者が駒場にはいます。グローバル研究のなかの基礎研究にあたるものを担う集団としてそれらの教員を糾合できないかという思いは長くありました。加えて、地域文化研究の教員と国際関係論の教員とが風通しよく話し合える環境がありましたので、地域と国際を両輪とする学知を練り上げたいという話が続いていました。その流れのなかで地域の名前を冠した研究センターが昔から活動していたため、その流れを尊重するという意味で「グローバル地域研究」という名の機構が成立したと私は理解しています。ですから地域文化研究もしくは地域研究を無くしてグローバル研究を立ち上げるという意味での組織改組・再編ではありませんでした。

遠藤泰生（えんどう・やすお）
プロフィールは059頁に掲載。

なぜ「グローバル」は日本語にできないのか

福武　グローバル・スタディーズに積極的な意味づけを与えている場合と、大学のプロセスのなかでグローバル・スタディーズという名称をたまたま選んだ、時流でつけたという場合などいろいろとあると思います。しかし少なくともそのなかで地域研究が残って、地域研究が重要だということがグローバル・スタディーズを名乗る際に立ち現れてくるというのは、アメリカにおける誕生とは対照的だと思いました。グローバル・スタディーズの理解のされ方が異なる、日本的な文脈があると思いますが、そのあたりをどう受け止めればよいのかについて、臼杵さんにお話をうかがいたいと思います。

臼杵　今日は野次馬として来ておりますので、制度的にいま作ろうとしている、あるいは完成しつつある組織に所属

臼杵陽（うすき・あきら）
プロフィールは058頁に掲載。

している方々とは違う立場から発言させていただきます。

まず、いちばん大きな問題は「グローバル」という名前です。つまりカタカナでしか表現できないというところの問題性です。ここはみなさんどのようにお考えでしょうか。おそらく「グローバル」の対語は「ローカル」になるはずです。「エリア」にはならない。にもかかわらず、たとえば同志社大学のように「超域」という言葉で、なんとか二つをつなげようとする。つまり「地域」と「グローバル」をつなぐ努力をしている。また東大駒場のように合体させて言葉を作る。東京外国語大学のように日本語と英語の齟齬がある。あるいは上智のようにきれいにまとめてしまう。

四人のお話を聞きながら、ある意味では「状況の関数としてのグローバル研究」だと思いました。つまり冷戦後に生まれた議論で、それをそのまま制度化する方向で新しい学問の領域が出てきているのですが、その意味ではまさに同志社が落とし子でしょう。というのも、同志社のグローバル・スタディーズ研究科はアメリカ研究から出ているからです。

グローバル化とは、しばしば「アメリカ化」だといわれました。少なくとも冷戦終焉前には、そのような議論が一時期ありました。つまり冷戦のなかでは、経済的グローバル化というときには、マクドナルドが来るとか、文化的な侵略のようなかたちで使われていた。それが米ソ冷戦後においては、「グローバル」という言葉がかなりポジティブな意味をもちながら、学問領域としてレジティマシーを獲得する。これはまさにアメリカの一極支配、世界の一極化と呼応している状況を受けたもので、日本の大学の多くがそちらの方向にスライドしていく。

しかし、それぞれの大学の戦後の伝統としてエリア・スタディーズがある。それをどのように接合するのかというところで、みなさん苦労している現実が見えてきました。これは学問分野や研究領域が新しくできるときのある種の産みの苦しみなのかもしれません。しかし一方で皮肉な見

方をすると、入れている袋は変わったけれども、中身のワインがほんとうに変わっているのかという問題と関わってくることになります。

ところが、現在グローバルという言葉に対して、流行らなくなった言葉として「ワールド」というものがある。つまり「ワールド・ヒストリー」というかわりに「グローバル・ヒストリー」と呼んでいる。この変化がはたしてなにを意味するのか。「グローバル・スタディーズ」とか「グローバル・イシュー」と対応したかたちで、なぜ「ワールド」ではいけないのか。

もっといえば、明治期、一九世紀における文明史的なことからいえば、「ユニバーサル」という言葉が使われている。「ユニバーサル・ヒストリー」などという言葉がある。なぜユニバーサルではいけないのか。なぜグローバルなのかという説明がなく、少なくともなんの根拠もなく使われている。つまり用語の選択がきわめて政治的なものとして現れている。この呼称の問題は、単に言葉遊びの問題だけではなく、本質的な問題として問わなければいけないという感じがします。これが第一点です。

「地域研究」という日本語の問題

臼杵　第二点目として、冷戦後のグローバル・スタディーズという問題のなかで、グローバル研究があくまで状況対応の関数だとするならば、地域研究との共存関係を説明するときに、エリアをどのような論理で説明するのかということが出てくると思います。とりわけ駒場とか東京外国語大学は、非常に深刻なかたちでできている。ディシプリンと言語という地域研究が伝統的に問題にしていることに関してこだわらざるをえないような状況があるなかで、東京外語や駒場は特色がある大学としてこれまで全国的に知られているし、国際的にも知られてきたということがある。

とりわけ東京外語は大学の英語の名称が「Foreign Studies」です。いわゆるフォーリン・スタディーズとグローバル・スタディーズとは、内外という二分法的な自他関係を超えて、どのように連続性をもって語ることができるのか、あるいはそうではないのか。

同時に「地域研究」という日本語の問題が出てきています。しばしば地域研究といったら一国内のローカル・スタディーズあるいはコミュニティ・スタディーズと間違えられてしまう。日本の場合はエリア・スタディーズとは理解されない場合が多い。「地方都市の研究しているのか」、「地方研究なのか」という誤解もある。他方で、研究者のあいだでは広く地域研究とは何かは知られている。実際問題として、研究者のみなさんにはほとんど血肉化、身体化しているようなところがある。にもかかわらず、一般の国民の多くは地域研究といってもイメージがわかない。

ローカルなのかエリアなのか。エリアというときに、日本を超えての外国研究だったらわかりますが、ある地域をどのように設定して、それをどう分析するのか。たとえばアフリカ研究、アジア研究、ロシア研究、ヨーロッパ研究とか、あるいは個別の国を単位にすればなんとなくわかる。ところが、地域設定がどこまで一般化したのかという問題が二点目です。

教育と研究の不整合

臼杵　三点目は、ここまで大学における教育の制度の問題を主に指摘したので、教育と研究との不整合の問題を指摘したい。駒場に関してはそれがあるからということで、棚上げをした状態でお話を続けられたのですが、研究と教育とのずれの問題です。

その場合の教育というときに、大学教育だけに本当に限定してよいのかという問題があります。つまり、グローバル教育というかたちで初等学校、中等学校における教育をもし仮にするのであれば、どうするのか。はなはだ卑近な言い方をすると、みんな内向きになってしまっていて、外国や歴史のことを知らない、あるいは知ろうとしないという現実がある。

いわゆる地球大の視野から俯瞰するという観点から物事を見るようにならなければならないというような教育目標で、どんな状態がグローバルな事象について知っていることになるのか。たとえばアフガニスタンをアメリカが攻撃したにもかかわらず、当時の小学生がアフガニスタンの位置を知っているのかというと、ほとんどが知らなかった。そのようなレベルの話にすり替わっている。どこにあるかを知っていればグローバルな視野を獲得したことなのか。

教育機関としてなにを目標としてグローバル・スタディーズを教育しているのか。そこで教育を受けた人たちがほんとうに「グローバルな人間」になるのか。また「グローバルな人間」とはどのような人間のことを指しているのか。それがいちばん具体的なのが同志社だったのです。究極的には文理融合でエンジニアとつなげるという、これはおもしろい試みだと思います。実際に「第三世界」とかアフリカなどに行って、そこの人たちとの交流のなかでという、これは試みとして凄まじくおもしろい。そのあたりのところはどうなのかという点です。

スペクトラムの二つの極としての グローバル・スタディーズと地域研究

峯　臼杵さんがおっしゃる通り、同志社のグローバル・スタディーズ研究科は、確かにアメリカ研究科から始まったのですが、現状ではアメリカ研究クラスターは全体の三分の一で、それを他のクラスターが包み込むような配置に

なっています。教員の考え方はいろいろですが、いわゆるアメリカ的なグローバリゼーションをアメリカ内部から批判的に観察するアメリカ研究者と、そのような動きを外部から見ている非アメリカ研究者が一緒になって、現代のグローバル化にもの申す、という構図になっているように思います。そういう意味では、確かに、我々はアメリカの落とし子というか、鬼っ子と言えるかもしれません。

グローバル・スタディーズという名称については、私はこのカタカナ用語に個人的にそれほど強い思い入れがあるわけではないですが、グローブというのは地球であって、地球はまっすぐに行くと元の場所に帰ってくるのです。ワールドやインターナショナルというと平面的ですが、グローブは円環であって、循環と相互依存のイメージを呼び起こす言葉です。それから、「スタディー」が「スタディーズ」と複数形になっているのは、多様な方法論と解釈を許すということでしょう。グローバル・スタディーズという語彙の特徴については、まずは、そのように考えることができる気がします。

そのうえで、グローバル・スタディーズと、エリア・スタディーズとしての地域研究の二つの関係性は、一つのスペクトラムの二つの極だと言えるかもしれません。あらゆる学知の手法を動員しながら、自分が設定したフレームに応じて地域の特質を切り取って見せるのが地域研究だとすると、地域のフレームをどんどん広げるうちに、地球という空間全体がフレームになって、グローバル・スタディーズが成立する。そして、グローバルを意識する地域研究者もいれば、地域を意識するグローバル・スタディーズの研究者もいるわけですから、地域研究とグローバル・スタディーズは、連続体のスペクトラムのなかに位置づけられるように思うのです。

しかし、この二極の立ち位置については、非和解的なところもあるように思います。グローバル・イシューを解決する実践的な学知としてのグローバル・スタディーズを見ると、どうしても普遍主義的な原理が前面に出てくることになります。国際的な人権規範や、人間開発などの国際的な規範があって、そこから問題解決の方向性を導き出そうとする立場が出てくる。他方、地域研究者の方では、多かれ少なかれ相対主義の構え方が共有されていると思います。地域研究者が広域的な地域のフレームを語る場合でも、村レベルのローカルな現場のリアリティが念頭にあるものですし、西洋中心主義と普遍主義に対するアンチとしての地域研究の伝統も色濃くあります。

連続しながら反発しあうという二つの原理にどのように折り合いをつけるのかというときに、私が重要だと思うのが、中程度に普遍的、ある程度まで抽象的で、同時に下に降りてくるような「曖昧さの魅力」を備えた思考の枠組み

です。寺田さんの上智大学では、鶴見和子さんたちが提唱した「内発的発展」は、そのようなものとして力強く誕生したのだろうと思います。言い方を変えただけかもしれませんが、今ではレジリエンスというキーワードがあります。他方では、遠藤さんの駒場が拠点ですが、現場の文脈を重視する国際規範である「人間の安全保障」もまた、そのような新しい枠組みになりうるかもしれません。曖昧で玉虫色なところがありますが、見方によってはラディカルな新しいコンセプトで、汎用性が高いのです。スペクトラムの中央部分にこういう概念装置をはめこみながら、グローバルとローカルないしエリアのあいだの往復運動を建設的なかたちで組織していく。そのような仕掛けが考えられないかなと思っています。

「グローバル」と「地域」をつなぐ教育の模索

福武　グローバル・スタディーズにもっとも積極的に意味づけをしようとしてきたのは上智大学だと思いますが、二〇一四年度新設の総合グローバル学部でもグローバルは日本語にしなかった。そこにはいろいろな議論があったと思います。そのあたりの経緯についてのお話と、総合グローバル学部でどのような教育を考えているのかうかがえればと思います。

寺田　いま峯さんもおっしゃったように、研究科とか専攻とか学部でもよいのですが、グローバル・スタディーズが何を意味するかということについては、教員のあいだでもきちんとした共通理解ができているわけではありません。たとえば、「総合グローバル」の「総合」とはなにかという話ですが、国際関係論も地域研究の伝統もあるので、これを総合させる、あるいはグローバルとローカルの見方を総合させるということだと説明しています。

話は少し変わりますが、昨年、ちょうど同じ時期に、文部科学省のグローバル人材育成推進事業というものがあって、外国語学部でこれに申請するということになりました。それでいま外国語学部の方でグローバル教育研究センターを開設しています。

地域研究との関連でいうと、京都大学では東南アジア研究センターの時代に、「Global Area Studies」という概念を打ち出していました。上智も「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」の英語名称を文部科学省に出さなければならなくて、それを「Area-Based Global Studies」にしたのですが、「Global Area Studies」にしようかという話もあったのです。しかし「Global」は、十数年前のアメリカの大学や研究所では、金融関係のことをのぞいてはほとんど使っていなかったように思います。国際関係論と地域研究的なプログラムを一緒にする時に「International and Area Studies」というように表現していて、この

「and」を取って一緒にするというのはありませんでした。

グローバル地域研究というのは、つまりアフリカも東南アジアもあるが、これと通底するような、あるいはグローバル・イシューかもしれませんが、そういうことを学ぶということでもあります。

総合グローバル学部では自主研究科目あるいはインディペンデント・スタディーズという科目を設けます。学生はたとえば東京でNGOのマネジメントのボランティアをするとか、タイに行ってタイ語を夏休みに勉強するとか、国連などのインターンシップに参加する。あるいは東北に行ってボランティアをする、あるいはフィールドワークをする。そういう学生の自主的な活動について、それをきちんと評価して単位を与えるという科目です。卒業に必要な一二四単位のうち最大で一二単位取得できますから、けっこう重要な科目です。

グローバルというと海外に出てなにかすることだと考える人がいますが、これはまったく誤りで、東京なり日本なりがグローバルな連関のなかで動いているわけです。たとえば私たち教員の一人には、都市の貧困のことを研究していて、渋谷の野宿者のグループを束ねて行政と交渉しているような人もいます。海外に出ていって、英語でペラペラと喋るという話ではない。あるいは日本国内の外国籍の人たちのことなどもあります。

「グローバル」は錦の御旗？

宮崎　かつて、今でもそのはずなのですが、地域研究は人文社会科学で重点的に進める必要のある研究分野という位置づけですし、既存のアカデミアを代表する学術会議でも地域研究委員会が設置されています。伝統的なアカデミアの中では、地域研究もようやく地位を得てきた段階です。

私などが大学に行っているころは地域研究というものはほとんどなくて、専門分野が研究の軸だったので、地域研究と研究分野の関係については、やや懐疑的でした。しかし、今では、私の専門である文化人類学をものみ込んだかたちで地域研究がアカデミアのなかでのユニットとして位置づけられてきているわけです。しかし、「グローバル」という言葉が、ある意味で錦の御旗になってしまって、それさえいえば、出す方が財布の紐をゆるめる傾向にある状況のなかで、地域研究という概念自体が色あせてしまっているという感じは否めません。

このような状況下で、地域研究者がグローバル・スタディーズのなかに入っていくことは、むしろ自衛本能ともいえます。地域研究といっていてもあまり理解されないが、じつは自分たちがやっている研究はグローバル・イシューの解決に役立つことを強調したいということで、積極的に関わっていっているのではないかと思います。ですからグローバルという流行語がなくなれば、またなにか次

のところに行くかもしれないと思います。

地域研究でも感じるのですが、とりわけ学士課程でグローバル・スタディーズというものがどう位置づけられるのでしょうか。私は地域研究についても、かねがね学士課程では難しいのではないかと思ってきました。古い考え方かもしれませんが、学士課程ではある程度のディシプリンをして、それをベースにして地域研究が成り立つのだろうと思っていたのです。しかし、さらにグローバル・スタディーズということになると、さらに難しいのではないかとも考えられます。

もっとも、大学教育自体がかなり変質してきており、ディシプリンなどはほとんど勉強しないという状況にあっては、まず「グローバル・イシューがあるのだよ」というかたちで提示して、そこでなにかの関心をもってディシプリンに入る、あるいはエリア・スタディーズを始めるといった効果はあるのかなと思いますが、いかがでしょうか。

重なり合う地域と言語への理解

遠藤　グローバルとローカルという話ですが、峯さんがおっしゃった「一つのスペクトラムのなかの二つの極」という見方に私も賛成します。東京大学の場合は地域研究ではなくて地域文化研究というように、文化という二文字が教育課程につきます。ですから、毎年進学してくる学生たちに地域概念の可塑性の話から私は授業を始めています。

どのようなことかといえば、学生一人ひとりがもっている問題関心に応じた地域の切り分け方があることを最初に話すのです。それはたとえば東京であってもいいし、あるいは利根川流域でもいい。外国ならば、ミシシッピ流域という切り方でもいいし、東ヨーロッパという切り方でもいいのです。さらにたとえば宗教で括られるような巨大な空間に地域がふくらんでもかまいません。誰もが「ある」と一般に信じている儒教などの精神文化のようなものでそれが括られてもよいのです。

ただし、これは学生にはよく強調することですが、一種類の地域に囚われる専門家になると、その地域の重層性みたいなものは見えてこなくなりがちです。ですから、東京研究をしたいのであれば二三区東京でも何でもかまわないけれども、その東京は、G8やG20に加わる経済先進地域の一部であると同時に、東アジアにあり、第二次世界大戦中そのアジアにさまざまなことを行った歴史をもつ地域でもある。

重なり合う地域それぞれの大きさ、広がりはその性質によって異なるのですが、その重なりの連関が捉えられないと、一種類の地域に関するただの物知りにしかなれません。そのような学生には地域を軸にしたグローバル・スタディーズはできない。ですから、そうした視野狭窄的な地

域研究はやめてほしいと思う。「やめてほしい」といってもやめられないかもしれないので、強制的に自分が考えているあるいは捉えている地域の妥当性なり正当性を自己点検するツールを学生は身につけねばいけません。政治学や経済学の理論もそのツールになりますが、一つはっきりしているのはその一つが語学だということでしょう。

日本語を通してしか世界を見ることができない人と、英語を通しても世界を見ることができる人、さらにアジア諸語やヨーロッパ諸語を通して世界を見ることができる人とでは、見える世界の範囲も形もおのずと異なります。ありきたりの話ですが、単一の言語しか操らない人はグローバルには視野が広がらないのです。そういう意味では、駒場の場合、複数の語学の知識の習得と地域文化研究の教育とがまだ密接に結びついています。たとえば、研究対象とする地域の言語で卒業論文を書くことを多くの学部学生に求めています。たしかに昨今は古いかたちの地域研究の人気が下降しつつあるのですが、だからといってグローバル・スタディーズや国際関係論に興味を抱く学生の方が世界を重層的に見ているかというと、そうともいいきれません。逆に語学力が不足して、ほとんど日本語の文献で国際関係論を勉強している学生などが現れ、「これはなんなのだ」と首をひねっておられる教員が時々いらっしゃいます。

限られた時間と資金を使いながら、どこまで学部の段階あるいは修士の段階で自分が専門とする地域に関する地域知を身につけるか、あるいは自分が把握したいと思う視点に立った世界の切り分け方、結び付け方を習得できるか。それを手助けし教授するのは教員の責任かと思います。

ただ、率直な話、教員よりも学生の方が世界の見方は感性がよくて、将来を見越していると私は感じます。われわれが思っていることを押しつけても学生はほとんど納得しない。学生が抱いている関心に応えるための地域の切り分け方を、ともに考え勉強する。そのようなやり方で私自身のグローバル・スタディーズというものをつくりあげていくのだろうと考えています。

三角測量——複数の「地域」をみること

峯　言語というツールについては、最近では電車の車内広告でも、コミュニケーション力を重視する英語塾の広告などをよく目にします。アメリカないしイギリスの英語表現をうまく使いこなせて、自分の意見をしっかり伝えられる。そうやって効率的なコミュニケーションができるプロフェッショナルな人材を育てる。さきほど宮崎さんもご指摘されましたが、そういう教育こそがグローバル・スタディーズを掲げる教育組織の任務ではないかという理解があり、その需要に応えなければならないという課題が確かにあります。それはそれとして、換骨奪胎を考えたいとこ

ろです。泥臭い地域研究の地平を踏まえて本当に実力があるタフな人材を育てようとしたら、英語であれ他の言語であれ、自分の言葉ではない言葉で喧嘩ができて、そのうえで、喧嘩の仲裁ができる。そこまでできる人材を育てるべきではないでしょうか。

地域のフレーミングとともに、最近大切だなと思うようになったのが、三角測量の仕事です。日本を足場としつつ、ウェイトのかけ方はいろいろあるにせよ、少なくとも他の二ヶ所をフィールドにするというわけです。私は毎年アフリカに行きますが、最近は東南アジア世界も面白いなあと思っています。定点観測をする地域研究者が十人集まってもグローバルになりませんが、三角測量をする地域研究者が三人集まれば、グローバル・スタディーズの条件が整ったと言えるのかもしれません。教員たちがそのようなネットワークを組織することができれば、複眼的な思考ができる学生たちも自然と育っていくのではないでしょうか。もっとも、先生方がそれぞれおっしゃった通り、教育には固有のステップというものがあり、学生たちに最初から三角測量で研究をしろというわけにはいきません。どうしてもうわべだけになってしまいます。しかし、何十年も研究生活を送っている者はもっと試みてもいい手法でしょうね。

求められているのは「英語教育」ではない

遠藤　私は専門が北アメリカ研究なので、アメリカの学者を招待した研究会に出席する機会が多くありますが、日米だけのグループですると、どうしても「あっちが本国の人だ」という意識になってしまうのです。そこにヨーロッパとアジアの研究者も混ぜてしまう。とくに私はヨーロッパの研究者の影響が大きいと思いますが、四地域合同で研究会を開催すると、アメリカの学者の腰がだんだんと引けてくるのです。それは単なる数の問題ではなく、視点の複数性の問題です。複数の視点に対する謙虚な思いが参加者に自然と生まれてくるのです。そのような研究を私たちがイニシアティブを取って切り拓いていくことも、グローバル・スタディーズの可能性の一つだろうと思います。アメリカ政治外交史を専門とする古矢旬さんが主催したグローバルなアメリカ研究プロジェクトの場でそのようなことを私はたくさん学びました。

また、日本のように政治秩序も経済秩序も安定している国がイニシアティブをとれることの一つに、紛争地域では蓄積できない学知の保護と蓄積があります。中南米やアフリカにはさまざまの政治体制の国があり、貯めることが許されない、抹殺されてしまう学知がある。それらをデータベース化し、私たちが守るということもできるのではないでしょうか。それらを含めて、日本から発信するグローバ

ル・スタディーズというものには、アメリカ発のものとは別のものがあり得ると考えます。難民や移民に関するデータの体系的集積を駒場が行っているのはその良き先例になると思います。

最後にもう一つ教育に関してですが、お話をうかがいながら、やはりみなさんは同年代の方だなと思いました。たとえば私がグローバル・スタディーズを発想すると、どうやったら日本の学生を世界に出してあげられるかという目線がどうしても前にでてきます。でも、実際には学生は、私が思うよりも先にグローバルな世界に出てしまっています。

どういうことかというと、中学くらいで親に頼んで、「自分はもう日本の中学には行かない」という選択をしていた学生が、現在われわれが「国際教養」などと呼んでいる教養を海外で身につけたあとで、日本に帰る場所を探しているのです。それらの学生が帰るときの受け皿となる大学教育機関というのは、意外と少ないのではありませんか。海外の大学の学士なり修士の学位をもった学生で「日本に帰ってきたい」という者がいる。彼らと話をすると、「英語でかならずしもプログラムをしなくていい。もう十分に英語でそういう仕事ができるので、日本という場でどのような国際研究を立ち上げるのか、それをきちんとした日本語で語ってもらいたい。それを学びたい」とときどき言われます。

そのような状況を見ていると、グローバル化のスピードは、自分をとうに追い越してしまっている。グローバルな人になってしまった学生たちが日本に戻ってくる流れを受け止めるような大学院が逆に必要になっていると、私は感じます。「出国応援型のグローバル化」と「帰国出迎え型のグローバル化」の二つの教育の場がこれからは必要ではないかと思います。

グローバル化のなかのアイデンティティ

臼杵　私はアラブ研究からイスラエル研究に移ったときに、たいへん困ったことが起こったのです。イスラエルの八〇パーセントを構成する「ユダヤ人」の問題です。移民の国であるはずのイスラエルのユダヤ人がグローバル化でディアスポラになる傾向が生まれています。もともとディアスポラのユダヤ人たちは「ユダヤ人」といわれますが、逆にイスラエルから離散した人は「イスラエル人」と呼ばれる。ところが、イスラエルに移民して住んでいるユダヤ人は出身地域によってお互いの文化的背景の違いが出てきてしまう。このユダヤ人かイスラエル人かという民族アイデンティティの問題です。

ようするに、グローバル化というときに、遠藤さんがおっしゃったような帰国型のものが――いまの話は今後の

グローバル・スタディーズの教育の側面でしょうが、ある種のアイデンティティ・ポリティクスに取り込まれていくかどうかという問題があります。つまり学生にとって「自分は何者なのだ」というすごく深刻な問題です。べつにグローバル・スタディーズといわずとも、たとえばディシプリンも教えられないで、なんとなくいろいろな問題を詰めこめられてしまったときに、結局は大学を卒業するときに「私は何者なのだ」とみんな思ってしまって、なにを勉強したのかがわからない。

ですから、先ほどグローバル・スタディーズがなにを教育の目標とするのかとお聞きしましたが、たとえば峯さんのいうスペクトラムでも、遠藤さんがおっしゃるように地域の切り分けでも、グローバルから切り取ることによってグローバルと地域の関係を見るというような説明の仕方でするときに、一人ひとり、個人の学生たちがほんとうにグローバルのレベルの理解、学知としてというよりもむしろ実感としてどのように認識できるのかという問題も、けっこう深刻だと思います。

そこで上智大学がすごいなと思うのは、村井吉敬さんなどのエビとかバナナというように具体的なモノを通して生産と消費の関係を語るという教育のあり方です。モノが日本に輸入されてきてどのようにして自分たちが消費しているか。生産者と消費者を結ぶ。このなかにも第三世界との関係が見えてくる。そのときに初めて「自分たちはグローバルのなかに生きているのだ」ということが実感できる。そのような教育はなかなか具体例がない。上智大学には伝統的にそのようなことを体現する教員がいたことが幸せだったのかもしれません。

経済の問題、金融の問題は出てこないという話もありましたが、TPPの問題を含めて、学生たちにとってみればこれはどのように捉えてよいかがよくわからない。たとえば「これは第二の開国だ」と反対している人がいれば、政府みたいに一所懸命に「開かなければいけない」という人もいる。ところが本音ではそうでもないみたいでよくわからないというのが学生の実感です。それをどのようにグローバル・スタディーズのなかで教えるのか、あるいは教えないのか。少なくともそこは回避するのかという問題です。

つまり日本が直面している深刻な問題のなかで、グローバル化することとナショナルなシンボルの立ち上げ、その相克のなかのアイデンティティの問題というのがかならず出てきてしまう。それを教育のレベルで、あるいは研究者のレベルでもかまわないのですが、どのように考えているのかという問題も一方であるような気がしていますが、いかがでしょうか。

宮崎　アイデンティティ・ポリティクスについてですが、

先ほど遠藤さんもおっしゃったような、最初からグローバル化してしまっている人材というのがいるとすれば、おそらくアイデンティティ・ポリティクスに対する態度もかなり違ったものになるのではないかと思います。推測でしかないですが、ある程度コスモポリタンな視点で見ることができるかもしれない。そのような可能性があります。がちがちのナショナリストになっていくわけではないかもしれない。

峯　昔から日本では、留学するとナショナリストになって帰ってくる、というケースがけっこう多かったですよね。ただ、最近は量が質に転化したというか、もっと「はじけた」人材が出てくる可能性が見えてきた感じも確かにします。

　同志社にも国際教育インスティテュート（ＩＬＡ）という英語だけで学部教育を行う部局があって、私はそこで「日本とアフリカ」という講義を担当しています。たまたま昨年の授業では、半分以上が韓国人の留学生でした。韓国の若者がアフリカに関する日本人の教員の授業を英語で受けるという時代になってきたわけです。

　この講義の最中に、教室で「三千万円の資金を提供するから、アジアとアフリカの将来のために有意義だと考えるプロジェクトのプロポーザルをつくってみよ」という宿題を出してパワーポイントで発表させたら、学生達はイノベイティブなプロポーザルをたくさん出してきました。たとえば「ユニクロにアフリカ的なデザインの衣類を作ってもらって、アフリカ大陸全域に出店する。そのためのデザイン研究所をアフリカにつくる」みたいな提案が次々と出てくるのです。

　学生それぞれですが、私の全般的な印象としては、日本人学生は慎重に考えるものの、冒険するパワーがちょっと弱いかな、と感じています。日本の学生たちの将来も大事なのですが、教室にいる学生の半分が留学生になると、どちらも責任をもって教育しないといけない。そして日本人学生がやや受け身になっている状況がある。高等教育の現場で、少し前には予想もしていなかった課題が生まれてきているのかな、という実感が正直あります。

遠藤　大学院や専門課程教育以前に、一、二年生の教育プログラムのあり方が、これから大きく変わる時代だと思うのです。じきに東京大学も、一、二年生の教育の大きな改革を公にします。上智大学のように、短期間、一学期なり二学期なり、海外に出ることを奨励する。そうしたグローバル化は急速に進むでしょう。

寺田　上智ではいま交換留学――授業料はこちらに納めてむこうに行って単位も取ってくる、これが年に三〇〇人近く出かけています。外国語学部だと三分の一くらいはつねに、一学期間、あるいは一年間ですが、行っています。そ

の枠がいま三〇数ヶ国に一八〇校くらいあります。イエズス会系の、アメリカでいえば小さな大学なども含まれています。でも、留学するには地方の小さな大学の方がよいという場合もあります。

学生にむけたメッセージ

福武　地域研究がグローバル・スタディーズを名乗ることによって、いい意味でこう変化していく、そもそも地域研究がグローバル・スタディーズだということも言えるかもしれませんが、よい意味で変わる面もあると思います。グローバルという問題を地域研究が扱うことによって、地域研究自体がどう展開していくのでしょうか。

峯　地域研究の面白さには、文系も理系も入ってくるというところがあります。同志社では文系の学生が電気工事をするような愉快なことがある、というお話をしましたが、もう少し根本的なグローバルな学知のレベルで文系と理系がどのように力を合わせるか、という課題もあります。グローバルに地球を見ると、国民国家はかさぶたのようなものかもしれません。これを剥がしたときに、究極的には個人の力が試されるのですが、一気に個人に行ってしまう前に見えてくるユニットがあるだろうと思います。かさぶたを剥がして見えるものには、エコシステムに根ざした地域という枠組み、そのようなシステムの制約を受けながら形づくられてきた地域の長期の歴史があり、宗教の伝播があります。グローバル・スタディーズにかかわる者が、このような地球の鳥瞰図を示していこうとすれば、マクロなレベルでも理系の研究に自らを開いていく姿勢が欠かせません。とりわけ生態学が重要なのだろうと思います。私自身は、生存基盤論のグローバルＣＯＥに参加して、このあたりでの京都大学東南アジア研究所の強みを実感しました。

地域研究が超域的に集まってグローバル・スタディーズをつくるという意味では、地域研究コンソーシアムそのものが、まさにグローバル・スタディーズの舞台なのかもしれません。院生たちには、まずはフィールドに出て実践的な人間力を鍛えていくことが大切だと言っているのですが、自分たちが最先端の融合的な研究科で研究をしているということも、自覚しておいてもらいたいところです。

寺田　私はキリスト教の人類学が専門ですが、主としてフィリピン、いまは日本国内のフィリピン、とくに東北被災地のフィリピンの人たちが教会を中心に集まり始めていて、その調査をしています。ですから、地域研究という意味ではフィリピン研究で、所属する主な学会は東南アジア学会という地域研究の学会です。　地域研究の立場からいうと、グローバル・スタディーズに接近するような地域研

究をいま考えています。この新しい学部としては、学生にはグローバルな事象に関する知識、理解を持つと同時に、地域からの視点を持ってほしいと考えています。

たとえば人質事件が起こったとき、「フィリピンのサンボアンガの人はどう考えているのだろう」というような想像力を持てるようになってほしい。「日本は安全でよかったな」と考えるのか、あるいは「日本で生活しているフィリピン人はどう思っているのかな」と考えるのか。同時にイスラム原理主義といわれるものだとか、テロリズムだとか、そのようなものに関する地域を超えた視点を卒論などで表現できるのかどうか。そのようなことができるような学生が育ってほしいということです。

宮崎　学生へのメッセージというと、端的にいってしまえばエビとバナナでしょうか。何か身近なものをきっかけにして気づく。その気づきの機会としてグローバル・スタディーズを活用できるのではないか。そこからむしろ地域研究に入っていく。「もう少し詳しく知りたい」、「問題を解明するにはもう少しこのようなことが必要だ」ということで、地域研究なり、あるいはさらに行ってディシプリン、さらにグローバル・イシューの解決にそこでおそらく戻ってくる。そういった往還運動をしてもらいたいと思います。

遠藤　グローバル・スタディーズというのは、自分の複層的な自己同一性を往還する感性を磨く学問だと思います。それを磨くために、やはり一度は現場に行ってほしい。やはり見ると聞くとでは大違いで、「見聞」という言葉はまだ生きていると自身の経験から私は信じます。拘束型労働・奴隷制度の歴史が私の専門の一つにあるのですが、カリブ海諸国やアフリカ諸国で調査をした折に目から鱗が落ちる経験を幾度もしました。「こういうことになっていたのか」という驚きを若い人には味わってほしいし、それを味わう機会を大学教育に携わる組織がプレゼントする責任は大きいと思っています。ですから地域研究なりグローバル・スタディーズを志す学生には、そのような驚きを求めて勉強してもらいたいと願っています。

臼杵　遠藤さんがおっしゃったように、学生たちに若いときに「異文化」のなかに自分を投じることで、自分が違うと感じる、自分の慣れたところから切り離される。その「切り離された」ということがいったいなにを意味するのかということを考える出発点になると思うのです。

そのときに、グローバル・スタディーズというのはまさに空間的なもので、空間的なものと多文化性といういわば広がりなのですが、いわば共時的なものと同時に通時的な、つまり歴史の重層性というのか、「共時的なことと通時的なこととのちょうど接点に自分はいるのだ」と。地域研究との絡みからいった場合に、グローバル・スタディー

ズを豊かなものにしていくとするならば、グローバル・ヒストリーとともに――われわれ歴史家はすぐに文字資料にいってしまうのですが、もっと大きく広げて人類史、あるいはもっと広げて地球史というなかで自分をどうやって位置づけるのか。

先ほどからずっと議論になっているように、地域研究とグローバル・スタディーズとは対立するものではなく、まさにスペクトラムというか、全体の一部であるとか、相互補完関係にある。それをどのように学生たちに教えるのか、あるいは学生たちがそれを体得していくのか、実感として感じるようになるのかということが重要だろうと思いました。

◉出席者紹介◉

①氏名……臼杵陽（うすき・あきら）。

②所属・職名……日本女子大学文学部・教授。

③生年・出身地……一九五六年、大分県。

④専門分野・地域……中東地域研究。主にパレスチナ／イスラエル、ヨルダン、レバノン。

⑤学歴……東京外国語大学外国語学部（アラビア語）、東京大学大学院社会学研究科修士課程（国際関係論）、同大学院総合文化研究科博士課程（国際関係論）、京都大学博士（地域研究）。

⑥職歴……佐賀大学講師・助教授（三二歳、七年間）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授、教授（三九歳、九年半）、日本女子大学文学部史学科教授（四九歳、七年半）。

⑦現地滞在経験……ヨルダン（在ヨルダン日本大使館専門調査員、二八歳、二年半）、パレスチナ／イスラエル（エルサレム・ヘブライ大学トルーマン平和研究所客員研究員、三四歳、二年間）、レバノン（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所中東研究日本センター研究員、半年間）。

⑧研究手法……主にインタビューと現地での参与観察。

⑨所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本イスラム協会。

⑩研究上の画期……一九九一年の湾岸戦争時、エルサレムから離れて避難した体験。九・一一事件時のメディアでの「イスラーム」の語り方をめぐる論争。

⑪推薦図書……板垣雄三『歴史の現在と地域学――現代中東への視角』（岩波書店、一九九二年）。

●出席者紹介●

①氏名……遠藤泰生(えんどう・やすお)。

②所属・職名……東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構・機構長、教授。

③生年・出身地……一九五五年、東京都生まれ。

④専門分野・地域……北米地域研究および北米太平洋地域研究。

⑤学歴……東京大学教養学部(地域文化研究専攻・アメリカ地域文化研究)、東京大学大学院人文科学研究科(比較文学比較文化専攻)、イェール大学大学院(歴史学専攻・合衆国史)。

⑥職歴……東京大学助手(三一歳、一年半)、名古屋大学講師・助教授(二年半)。

⑦現地滞在経験……アメリカ合衆国(二七歳、四年、留学生:三九歳、一年半、客員研究員)。四〇代〜五〇代、カリブ海諸国、東西アフリカ諸国、太平洋島嶼諸国へ、短期調査多数。

⑧研究手法……歴史学研究と比較文学比較文化研究を土台に文献資料調査およびフィールド調査に基づく実証研究を行う。

⑨所属学会……アメリカ歴史学協会(AHA)、アメリカ学会、日本国際政治学会、ジェンダー史学会、国際比較文学会。

⑩研究上の画期……地域文化研究の学部教育で事象を複眼的に捉える魅力を学ぶ。合衆国の大学院では、研究者の生き方と研究テーマが相即不離にあることにあらためて目を見開かされた。九・一一以後、北米地域研究をグローバルな文脈に開く必要性を痛感。

⑪推薦図書……対象地域にその地域を越えるものを見たという意味で、北米地域研究の古典トクヴィル著『アメリカのデモクラシー』(岩波文庫)を、ローカルからグローバルに繋がる地域の重層性を掘り下げた共同研究の成果として、遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたち——カリブ地域文化研究』(東京大学出版会、二〇〇二年)をあげておく。

●出席者紹介●

①氏名……寺田勇文(てらだ・たけふみ)。

②所属・職名……上智大学総合グローバル学部・学部長、教授。

③生年・出身地……一九五〇年、東京都。

④専門分野・地域……文化人類学・フィリピン研究。

⑤学歴……同志社大学神学部、同大学院神学研究科(組織神学専攻)、フィリピン大学社会科学哲学学部大学院博士課程(フィリピン研究専攻)。

⑥職歴……鹿児島大学南方海域研究センター(助手、助教授六年半)、上智大学外国語学部(助教授、教授二五年)を経て現職。

⑦現地滞在経験……フィリピン(留学時に三年半)、米国(コーネル大学東南アジアプログラム客員研究員)など。

⑧研究手法……フィールドワーク(一年以上の住み込み)、参与観察、聞き書きなど。日本占領期フィリピンのキリスト教会の研究では、各国の文書館で史料調査、複数の国で聞き取り。

⑨所属学会……東南アジア学会、日本文化人類学会。

⑩研究上の画期……冷戦構造の解体。東西対立、右と左という対立図式、二項対立で世界の出来事を説明し、わかったふりをすることができなくなった。

⑪推薦図書……Reynaldo Clemeña Ileto(1979) *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Ateneo de Manila University Press.(レイナルド・C・イレート『キリスト受難詩と革命——一八四〇〜一九一〇年のフィリピン民衆運動』清水展・永野喜子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳、法政大学出版局、二〇〇五年)。

◉出席者紹介◉

①氏名……宮崎恒二（みやざき・こうじ）。

②所属・職名……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授。

③生年・出身地……一九五二年、愛媛県生まれ。

④専門分野・地域……文化人類学、インドネシア、マレーシア。

⑤学歴……国際基督教大学教養学部社会科学科（人類学専攻）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程（社会人類学専攻）、ライデン大学社会科学部ドクトランドゥス課程（文化人類学専攻）修了、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程（社会人類学専攻）単位取得退学、ライデン大学社会科学部博士号（文化人類学専攻）取得。

⑥職歴……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（一九八四年から五年間）、助教授（一九八九年から七年間）、教授（一九九六年から）。この間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長（二〇〇一年から四年間）、国立大学法人東京外国語大学理事（二〇〇五年から二〇〇八年までは兼副学長、二〇〇九年からは理事）。

⑦現地滞在経験……インドネシア（二八歳から二年間、研究員）。

⑧研究手法……参与観察、インタビューを用いた現地調査が研究の基本であるが、在地文書も資料として用いる。

⑨所属学会……日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、日本オセアニア学会、Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

⑩研究上の画期……インドネシアの民主化。

⑪推薦図書……P・E・デ・ヨセリン・デ・ヨング他『オランダ構造人類学』（宮崎恒二他訳、せりか書房、一九八七年）。

◉出席者紹介◉

①氏名……峯陽一（みね・よういち）。

②所属・職名……同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授。

③生年・出身地……一九六一年、熊本県天草生まれ。

④専門分野・地域……アフリカ地域研究、人間の安全保障研究、開発経済学。

⑤学歴……京都大学文学部現代史学科卒、同大学院経済学研究科修士課程修了。

⑥職歴……中部大学国際関係学部講師・助教授・教授（二〇〇六年まで、一三年間）、大阪大学大学院人間科学研究科准教授を経て、二〇一〇年より現職。

⑦現地滞在経験……一九九八年から二〇〇〇年まで、南アフリカのステレンボッシュ大学政治学科に勤務し、競争原理に基づく大学改革を目撃。それで同国の文系諸学問の基礎体力が向上したかというと、疑わしい気がする。

⑧研究手法……文献調査、史料調査、計量、ナラティブ、参与観察など、何でも少しずつやっている。

⑨所属学会……人間の安全保障学会（事務局長）、日本アフリカ学会、日本平和学会、国際開発学会など。

⑩研究上の画期……二〇〇三年、人間の安全保障に関する「緒方・セン委員会報告」が刊行された。南アフリカから帰国後、人間の安全保障の研究プロジェクトに参加したことで、研究の進路が大きく変わってしまった。

⑪推薦図書……自己宣伝で恐縮だが、次のもの。Yoichi Mine, Frances Stewart, Sakiko Fukuda-Parr and Thandika Mkandawire eds., *Preventing Violent Conflict in Africa*, Palgrave, 2013. アフリカを舞台として、定性的な歴史・地域研究と計量政治学の手法を組み合わせている。